

アンドロゲン制御に伴う前立腺癌微小免疫環境の変容の掌握と新規治療戦略

楊井 祥典¹⁾、小坂 威雄¹⁾、北野 滋久²⁾、大家 基嗣¹⁾

1) 慶應義塾大学医学部 泌尿器科学教室

2) がん研有明病院 先端医療開発科

【目的】

ホルモン療法が前立腺癌微小免疫環境に与える影響について着目することで、多様な予後を辿る前立腺癌の腫瘍内不均一性の解明を試みた。

【方法】

(1) 診断時の前立腺針生検検体とホルモン療法後の前立腺全摘検体の腫瘍免疫細胞を多重免疫染色して比較した。

(2) 特徴的な群について臨床所見との関連を検討した。

【概要】

(1) ホルモン療法により、CD4 陽性 T 細胞、CD8 陽性 T 細胞、Foxp3 陽性制御性 T 細胞、CD204 陽性腫瘍関連マクロファージ、CD20 陽性 B 細胞のいずれもが増加していた。ホルモン療法により腫瘍免疫が惹起されることが示唆された。

(2) CD8 細胞が優位に増加する群と CD20 群が優位に増加する群に大別することができ、前者は後者に比べて有意に術後再発率が高く予後不良であった。

【成果】

(1) について 2024 年 11 月に国際誌 The Prostate に報告した。

(2) RNA シークエンスを施行した。今後データ解析を進める。